

英語命令文における don' t の位置付けについて

鈴木, 右文
九州大学言語文化部言語科学部門

<https://doi.org/10.15017/6796393>

出版情報 : 言語科学. 35, pp.25-34, 2000-02-29. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン :
権利関係 :

英語命令文における *don't* の位置付けについて^{註1}
(On the Status of *don't* in the English Imperative)

鈴木 右文

1. 英語の否定命令文

英語の否定文は (1) のように通常主語と本動詞との間に *don't* を含む。

(1) I don't know who broke this vase.

しかし動詞が *be* のときは *don't* を用いることができず、*not* だけが出現する。

(2) *I don't be hungry any more.

(3) I am not hungry any more.

これに対し、否定命令文では動詞が *be* であっても必ず *don't* を伴わなくてはならない。

(4) Don't be foolish.

(5) *Be not foolish.

また、この *don't* が占める位置は通常の否定文での位置とは異なり、主語名詞句に先行するのが普通である。^{註2}

(6) You don't like onions.

(7) *Don't you like onions.

(8) *You don't dare kiss my wife. (Cohen 1976 as cited in 澤田 1983: 31)

(9) Don't you dare kiss my wife. (Cohen 1976 as cited in 澤田 1983: 30)

これらの否定命令文の特殊性に関しては *don't* の地位を中心にして様々の異なった説明が試みられてきたが、本稿ではそれらのうちある対立する2つの分析方法を取り上げて概観し、それらの問題点を検討し、あるべき説明方法の方向性を探る。

^{註1} 本稿は『事典・テーマ別現代の英文法』（仮題、2000年内に刊行予定、大修館書店）の「命令文」の章の原稿として筆者が執筆した内容のうち、1つの節にヒントを得て構成を大幅に変更し、論拠を加え、原稿にはなかった自らの代案を合わせたものである。

^{註2} (8) は普通非文であるが、実際には主語が先行していても許されることが少なからずある。例えば Quirk et al. (1985: 830) では (ii) を (i) に比べて *less common* とし、非文とはしていない。

(i) Don't you open the window.

(ii) You don't open the window.

また、主語名詞句が先行する例の方が *don't* が先行する例に比べてより自然に感じられるケースすら存在する (Davies 1986: 92)。

(iii) ?Don't those with luggage leave it unattended.

(iv) Those with luggage don't leave it unattended.

本稿では議論を単純化させるため、主語が先行することは許されないものと事実を理想化しておく。

2. *don't* を *Comp* に相当する位置に置く分析

Culicover (1976) は英語命令文には AUX 節点がないと考えている。その理由は、命令文の派生において主語の *you* が削除される変形 (*you-Deletion*) を設定する際に、その適用の有無が AUX の有無に依存するという点にある。平叙文では時制や法助動詞の位置を確保するために AUX が存在していて、*you* を削除する変形の構造記述 (*structural description*) に合致しておらず、主語の削除が不可能であるが、命令文では AUX が欠けているためにこの変形の構造記述に合致して主語の削除が原則として適用される。

命令文が AUX を欠いている更なる証拠として、澤田 (1983) から論拠を3つほど簡単に眺めておく。まず第1は、命令文には AUX が支配する典型的な要素である時制や法助動詞が現れ得ないという点である。確かに命令文には現在形も過去形もなく、*can* や *will* などの法助動詞が現れることもない。

(10) (You) be / *are quiet. (澤田 1983: 21)

(11) *Will sign the paper, please. (澤田 1983: 22)

第2は、強調不変化詞 (*emphatic particle*) の *too* / *so* に関するものである。これらは話者が主張する内容の真実性を強調するもので、(13) のように AUX の直前の位置には現れないが、(12) のように AUX の直後の位置には生起することができる。

(12) Tom can too / so speak Old English. (澤田 1983: 25)

(13) *Tom too / so can speak Old English. (澤田 1983: 25)

これに対し命令文では、(14) のようにこれらの強調不変化詞は使用できない。

(14) *Do too / so run, please. (澤田 1983: 26)

(12)-(14) の例は、これらの強調不変化詞が AUX の直後の位置にのみ生じることができ、命令文が AUX を持たないと仮定すれば説明できる。また意味的に見ても、これらの強調不変化詞は話者の心的態度 (*modality*) を表すので、それが生起できないということは、命令文には心的態度の存在場所である AUX が存在しないものとも考えられる。第3の点として、命令文で (15) のように話者の判断を示す文副詞類 (*sentence adverbials*) が不可能なものも同様に AUX の欠如に由来するものと説明することができる。

(15) *Surely / *In fact / *Perhaps, leave for Tokyo tomorrow. (澤田 1983: 26)

このように命令文が AUX を欠くのであれば、*Do-Replacement* は適用できないことになる。*Do-Replacement* というのは、*do* を支配する AUX 節点に動詞の *be* または *have* が繰り上がって *do* に成り代わる操作である。英語命令文では *Do-Replacement* を適用して (5) のような形を生成することは不可能であるが、このことは、英語命令文にもともと AUX 節点がなく、*Do-Replacement* の構造記述に合致しないために *Do-Replacement* が適用されないとして説明することができる。

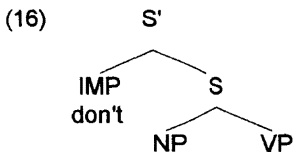
以上のような分析が正しいとすると、(4) のような命令文では *don't* が占める位置は AUX ではないということになる。そこで Culicover は *don't* を文頭に導入する特別の変形が必要であるとしている。

る。しかしそれでは事実に合わせて特殊な変形を設定するだけなので、この変形によって事実が説明できるとは言えない。

そこで澤田 (1983: 28-30) は $S' \rightarrow \text{COMP} / \text{IMP } S$ なる句構造規則 (phrase structure rule) を提案し、英語命令文では COMP のかわりに IMP が生じ、*do*, *don't* はこの IMP に支配される sentence particle であると考えている。従って、AUX がなくても *don't* が占める位置が存在することになる。

このように *don't* が Comp に相当する位置 (S' に直接支配 (immediately dominate) され、姉妹 (sister) の S に先行する位置) に現れるものと仮定すると、(8) (9) のように主語が *don't* に後続する語順が正しいことを説明することができる。

以上のような分析は *don't* が AUX と無関係に Comp に導入されるとするものであり、概ね (16) のような構造を提唱するものである。



3. *don't* を TP に付加させる分析

Zhang (1990) は様々の論点から従来の否定命令文の分析を批判しているが、その中には前節での分析に対する反論となる論点が見いだせる。

まず、話題化構文 (Topicalization construction) に関する論点が見られる。話題化構文での話題 (Topic) は普通 TP (前節の枠組みで言えば S) に左側付加 (left-adjoin) されていると考えられている。付加は最大投射 (maximal projection) たる非項 (nonargument) にのみ可能であるもの (Chomsky 1986) と仮定すると、(17) が示しているのは、繰り上がった法助動詞が占める $C(\text{omp})$ より左方にある CP の左側付加の位置を話題が占めることができないことである。

(17) *That classic novel, can't you read by next week? (Zhang 1990: 75)

don't を用いた否定命令文に話題化が適用された場合、(19) のように話題は *don't* の左方に置かれなくてはならない。

(18) *Don't that computer (you) use while I am gone. (Zhang 1990: 66)

(19) That computer don't (you) use while I am gone. (Zhang 1990: 66)

don't が $C(\text{omp})$ に支配されるという分析のもとでは、(18) は話題が TP に付加されれば問題ないはずなのに実際は非文となっている。また (19) では、話題が $C(\text{omp})$ より左方であって CP に付加しているものとしか考えられず、(17) と矛盾してしまう。従って *don't* が占める位置が $C(\text{omp})$ であるとする分析自体に問題があるのではないかということになる。

次に縮約 (contraction) に関する論点がある。まず、 $C(\text{omp})$ の位置にあるものは (20) のように通常主語との縮約が許される (*doncha = don't you*) 。

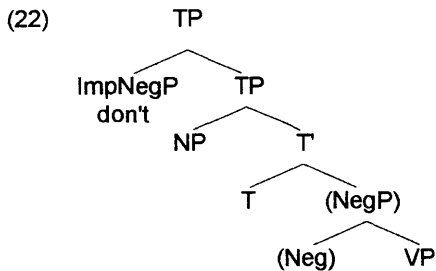
(20) *Doncha wanna go now?* (Akmajian, 1984: 16)

それに対し命令文ではそのような縮約は難しい。

(21) **/??Doncha hit me!* (Akmajian, 1984: 16)

従って命令文での *don't* は疑問文の場合とは異なり、C(omp) の位置にはないのではないかということになる。

そこで Zhang (1990) は、*don't* が Neg に相当し、これが平叙文での否定の位置 (TP と VP の間) に現れる NegP とは異なった ImpNegP という句を構成し、その ImpNegP が TP に左側付加しているものと分析する。このように考えると、命令文の基本構造は (22) に示されたようになる。



この分析では上述の2つの問題は生じない。まず話題化の問題だが、(22)の命令文の基本構造に話題化が適用されれば、話題はTPの左側に付加し、(19)の「話題+*don't*」の語順が生じる。(18)の「*don't*+話題」は、(22)で話題をTPの下方の切片 (lower segment) に付加させることになるので、付加は最大投射 (切片ではない) に限るという原則からすると許されない語順である。次に縮約の問題であるが、*don't* はTP付加の位置にあつてC(omp)位置とは無縁ということになるので、そもそも「C(omp)位置にあるものと主語との縮約」には当たらず、縮約が適用されることはないという説明できる。

確かに、ImpNegを設定する分析は、TPとVPの間に介在できるNegPと合わせて2つの*not*を含んだ(23)のような例を説明することができる。

(23) *Don't you not listen to me!* (Zhang 1990: 81)

2節での枠組みでは、通常否定辞はAUXに支配されると考えられているにもかかわらず、Comp位置に*don't*がおさまるだけなので、(23)のような例をZhangのように明快に説明することができないように見える。

また、前節で見た命令文がAUXを欠く論拠についても、Tが範疇 (category) としては存在してもその中身が[-finite]であるという線で考えれば説明できそうである。まず法助動詞や時制が出現しないという点だが、Tが[-finite]であれば当然である。強調不変化詞の*too/so*と話者の判断を表す副詞というmodalityに関係した点については、不定詞節も含めて[-finite]の節にはmodalityが存在しないと仮定することによって説明できる。

4. 問題点

一見よりよい分析のように見える Zhang (1990) であるが、3 節で見た話題と *don't* の語順と縮約の議論、また (23) に関する議論はどれも説得力を欠く。

まず話題と *don't* の語順についてだが、Zhang の説明では (18) (19) ともに説明できるのに対し、2 節の分析ではいずれの例文に対しても誤った予測をしてしまうことが示唆されている。しかし (18) が非文であることが示すのは、命令文の *don't* が C(omp) 位置に生じ得ないということではないと思われる。というのは、(18) と同じ語順を示す (24) の疑問文では、明らかに *can't* が C(omp) の位置を占めて話題が TP 付加の位置に生じることができるはずであるにもかかわらず、非文法性が生じているからである。

(24) *Can't that classic novel you read by next week?

(18) (24) が許されないのは、文頭の head と残りの文との間に話題が介在することが統語的な語順の問題以外の何らかの理由で許されないからと思われる。そうだとすれば、(18) はもはや Zhang を利するものではなくなる。

(19) もまた Zhang の分析を選ぶ材料にはならない。Zhang は (17) を盾に話題が CP (S') には付加できないことを前提にして議論を進めているが、(25) (26) のような場合にはこうした位置への話題の付加が必要になるように思われる。^{#3}

(25) These pictures, what can anyone do about?

(Langendoen 1979: 429, as cited in Kuwabara 1990: 149)

(26) And a book like this, to whom would you give?

(Delahunty 1983: 385, as cited in Kuwabara 1990: 149)

縮約に関する議論も弱い。*doncha* という形には *you* が含まれているわけだが、命令文の主語 *you* は通常削除されており、それを音形を伴ってわざわざ出現させる場合というのは *you* を強調し強勢を伴わせるときと考えられ、それが弱化して縮約形の一部に吸収されるということは考えにくいことである。

加えて、(23) のような否定辞が2つ現れる例に関しても Zhang の分析は特に有利とはならない。最初の *nt* は Neg という否定範疇に属して文否定 (sentential negation) の機能を持ち、2 番目の *not* は VP を領域 (scope) として句否定 (phrasal negation) の機能を持ち VP に付加していると考えれば、2つの *not* があるからといって1つの節の中に否定辞専用の位置が複数なければならないということにはならない。

従って3節の分析が2節の分析より有利とは言えず、2節の分析を基本的には正しいものとしてもよいように思われる。しかし2節の分析にも PP Approach 以来の理論に合わない部分が多い。(16) の構造のように S が NP と VP だけを支配しているのは全くの外心構造 (exocentric structure) であり、PP (Principles and Parameters) Approach で言えば TP が head の T を支配しない構造であって認められない。また、*don't* を単に命令文特有のものとするのではなく、もう少し一般性を持った捉え方をしたい。

^{#3} 残念ながら (17) が非文となる理由についてはここで提唱できる方法がない。

5. 代案

4 節で見たように、*don't* が C(omp) 位置にないとする証拠は弱く、そのように考える必要はないように思われる。また、命令文は [-finite] T を持つと考えれば、2 節での分析のように AUX (またはそれに相当する T) 節点そのものがないと考える必要はないように思える。従って本稿では *don't* が C(omp) 位置にあるものと仮定し、更に PP Approach 以来の文構造を採用して T も存在する構造を仮定する。

本論では *do* が C として導入されると分析する。これはちょうど TP と C = *if/whether* が併合 (Merge) して疑問節が生じると同様に、命令文では TP と C = *do* が併合するものとする。 *don't* については、*don't* が命令文独自の一つの語彙項目 (lexical item) として導入されるのではなく、命令文の *do* に Neg として導入された *not* が編入 (incorporate) して生じるものとする。⁸⁴ *don't* が一つの語彙項目として導入されるのなら、*Do come!* のような場合の *do* は *don't* の *do* とは別物と考えることになるが、本稿では命令文には常に *do* が導入され、否定辞の *not* があればこの *do* へ編入することもでき、肯定文ならば通常省略するものと考えておく。⁸⁵

このように考えると、*don't* が主語に先行する (9) の語順が説明できる。*do* は C として併合されるので、主語よりも前の位置を占めることになる。また (8) の場合は、*do* が C 位置にあるので、主語が CP 指定部 (CP specifier) にでも移動しない限り派生不可能であるが、そのような移動の駆動要因 (driving force) は見当たらない。

この分析で最も大きな問題となるのは、命令文の C にはなぜ *do* が導入されるのかという点である。本稿ではそれは causative 特性 (causativity) に関係があるものとする。命令文は他者に何かをさせるために発せられる文であって、その意味では使役と本質的に似ている。そこで命令文の主要部である C は使役特性を持ったものが占めなければならないと考える。⁸⁶ 実際 Pollock (1989) は、*do* は (27) に見られるような、古英語・中英語における使役の本動詞 *do* の名残りであるとみなしている。

(27) Sodeynly rescous doth hym escapen. (Mossé 1959: 145)

'suddenly the rescue makes him escape' (現代英語訳は Pollock 1989: 403)

Pollock の見方に従うならば、現代英語の命令文の *do* はこの使役の *do* からのいわば文法化 (grammaticalization) という形で生じているために使役特性を持っていると解釈してもよいだろう。

⁸⁴ 編入については Baker (1988) を参照。

⁸⁵ 主語が削除されないときには編入が義務的 (obligatory) で (i) のような例は認められない。

(i) *Do you not sit down. (Culicover 1976: 151)

これについては (35) に関して後述のように、文頭での多重強調 (*do* と *you*) で文法性が落ちるものと思われる。なお、*don't* は強調の機能ではなく否定の機能を持つことになるので、*don't you VP* は許される。

⁸⁶ ミニマリスト・プログラム (minimalist program) の枠組みで言えば、C にある強い使役素性 (strong causative feature) がチェック (check)・削除されるために使役素性を持った動詞類が C へ SPELL-OUT までに移動しなくてはならないといった述べ方になるかもしれないが、本節では敢えてそのような述べ方をしていない。これは (「併合」などの用語が用いられていることで明らかなように) 筆者がミニマリスト・プログラムを有望と考えていないことを意味するわけではなく、ミニマリスト・プログラムでの記述方法を厳密に適用すると煩雑になるし、理論の進展が速く、用語の置き換えやメカニズムの変更が頻繁だからである。なお、ミニマリスト・プログラムについては Chomsky (1995, 1998, 1999) を参照。

²⁷ こうして *do* は C として導入されるものとする。

do が用いられない否定命令文はどうなるか。まず (28) である。

(28) *Be not foolish. ((5) の再掲)

(28) では、C 位置に *do* が導入された後削除されるという分析はできないと考える。本節で既に述べたとおり、*do* は肯定文の場合に通常省略される（残留すれば強調の解釈が生じる）と仮定しているが、否定文の場合は原則として省略されない（注5で見たとおり、*don't* の役割は強調でなく否定である）と考えておく。そうすると (28) に関して残っている可能性は、本動詞 *be* が Neg の左方の T へ移動して C は空 (empty) であるか、あるいは *be* が T を経由して C へ移動しているかのいずれかであるが、C に使役の *do* が導入されていなければそもそも命令文としての解釈が成立しないのでいずれにしても許されない派生である。従って、(28) の意味の命令文は、(29) のように *do* が導入されることによって生成されなくてはならない。

(29) Don't be foolish. ((4) の再掲)

次に助動詞が用いられた例 (30) である。

(30) *Can not run faster than I.

これも *be* 動詞の場合と同様に、*do* が導入後に削除される派生は許されず、*do* が導入されなければ命令文として解釈されない。また *do* が導入されている (30) のような例はどうか。

(31) *Don't can run faster than I.

これについては、命令文の causative *do* が [-finite] の TP を選択する (select) ものと仮定すれば、法助動詞は [-finite] T に生じないので、問題なく排除される。

また、使役の特性を持つ動詞類は *do* だけでなく、いわゆる使役構文に用いられる動詞もそうであるが、そのような動詞を *do* のかわりに用いて (32) のようにすることはできない。

(32) *Make not John go. (Don't make John go. の意味)

make は明らかに使役特性を持つので C の位置を占めれば命令文として成立するかもしれないが、英語では本動詞が C 位置へ移動することはできないものとされているので、(32) は *make* が C へ移動できないという理由で非文となるものと考えられる。²⁸

2 節で見た命令文が AUX を欠く根拠は、どれも以上の代案にとって問題にはならない。まず法助動詞や時制が出現しないという点だが、T が [-finite] なのだから当然である。強調不変化詞の *too / so* と話者の判断を表す副詞という modality に関係した点については、不定詞節も含めて [-finite] の節には modality が存在しないと仮定することによって説明できる。

なお、(33) のような *never* を用いた否定命令文のケースと肯定命令文のケースでは、*do* の削除が許される。

²⁷ 文法化については Hopper and Traugott (1993) を参照のこと。なお、この speculative なアイデアについての具体的な英語史的考察は別途必要であろう。

²⁸ その理由については本論では立ち入らない。

(33) Never give up.

(33) のような場合には *do* が削除されないのは難しいかもしれないが、肯定命令の場合は (34) のように *do* が削除されない場合もあり得る。

(34) Do sit down.

但し主語が出現する場合は *do* は削除されなくてはならない。

(35) *Do you sit down. (Culicover 1976: 150)

never と *do* の組み合わせと (35) が許されないのは、恐らく *do* が強調の解釈を誘発するためと思われる。*never* も否定の強調の機能を持つし、省略されるのが普通の主語が出現すればそれも強調になり、これに加えて *do* が削除されずに残留しているのは、1つの文の文頭で多重の強調が生じるために許されにくいものと思われる。文頭というのは類似の資格のものが並ぶのを嫌う位置であり、(36) (37) のように話題が2つ並ぶケースも認められにくい。

(36) *To John, a letter, Mary sent. (Rochemont and Culicover 1990: 191)

(37) ?For John, a book, I would never buy. (ibid., 183)

6. まとめにかえて

生成文法による命令文の分析はますます行われてきているとっていいだろう。中でも命令文の基本的統語構造に関しては、平叙文の構造とどのように似ていてどのように異なるのかを巡って議論が繰り返されてきている。だがしかし、いまだにこれが定説と呼べるものは出てきていないように思う。それだけ決め手に欠ける領域だということなのではあるが、取り組む面白さは大きいと言えるだろう。本稿は *speculative* な要素を多く含むが、何らかの貢献ができていれば幸いである。なお、本論の内容に関わりのある論考として Tanaka (1988), Lasnik (1995) なども参照していただきたい。

参考文献

- Akmajian, Adrian (1984) "Sentence Types and the Form-Function Fit," *Natural Language and Linguistic Theory* 2, 1-23.
- Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Campos, H. and P. Kempchinsky (eds.) (1995) *Evolution and Revolution in Linguistic Theory*, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (1998) "Minimalist Inquiries: the Framework," in *MIT Working Papers in Linguistics* 15.
- Chomsky, N. (1999) "Derivation by Phase," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 18.
- Cohen, A-R. (1976) "Don't You Dare!" in Hankamer and Aissen (1976).
- Culicover, P. W. (1976) *Syntax*, Academic Press, New York / San Francisco / London.
- Davies, E. (1986) *The English Imperatives*, Croom helm, London / Sydney / Dover.
- Delahunty, G. (1983) "But Sentential Subjects Do Exist," *Linguistic Analysis* 12, 379-398.

- Hankamer, J. and J. Aissen (eds.) (1976) *Harvard Studies in Syntax and Semantics*, Harvard University.
- Hopper, P. and E. C. Traugott (1993) *Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kuwabara, K. (1990) "An Argument for Two Different Positions of a Topic Constituent," *English Linguistics* 7, 147-164.
- Langendoen, T. (1979) "More on Locative-Inversion and the Structure Preserving Hypothesis," *Linguistic Analysis* 5, 421-437.
- Lasnik, H. (1995) "Verbal Morphology: *Syntactic Structures* Meets the Minimalist Program," in Campos and Kempchinsky (1995).
- Mossé, F. (1959) *Manuel de l'anglais du moyen âge, des origines au XIVème siècle*, Aubier, Paris.
- Pollock, J.-Y. (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London / New York.
- Rochement, M. and P. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 澤田治美 (1983) 「英語命令文の構造的特性：特に範疇 AUX と COMP の不在を中心として」『言語研究』 83, 15-40.
- Tanaka, S. (1988) "Some Notes on English Clauses," *Linguistic Analysis* 18, 156-181.
- Zhang, S. (1990) *The Status of Imperatives in Theories of Grammar*, Doctoral dissertation, The University of Arizona.